

## 【資料紹介】

## 上田市立図書館花月文庫蔵『諏訪大明神本地』

— 解説と翻刻 —

宮 崎 智 江

## 【解 説】

ここに翻刻紹介する上田市立図書館花月文庫蔵『諏訪大明神本地』は御伽草子中の雄編として「諏訪の本地」の名で知られる甲賀三郎の物語の一伝本である。まず、該本の書誌を記す。

写本一冊。縦257<sup>ミ</sup>、横160<sup>ミ</sup>の半紙本。後補の青色表紙中央に題簽「諏訪大明神本地『甲賀三郎頼方』物語」とペンにて記す。楮紙の袋綴。本文36丁。遊び紙、巻頭巻末に各一枚。丁ごとに折目に丁数を示す数字あり。半丁の行数8行、各行20字前後。内題「諏訪大明神本地」。松井六右衛門なる人物の書写で、書写の時期は近世末期であろう。「へ」、「へ」のように鈎印をもって全体を五段に分ける。巻頭の遊び紙に旧蔵者飯島花月のものとおぼしき書き込みが以下のようにある。（カッコ内は割注）

正保三年版ノ浄瑠璃ニ『諏訪本地兼家』トイフモノアリ  
（井上播磨掾ノ正本ニモ『甲賀三郎』トイフアリ）又宝

永元年四月ノ竹本座正本ニ『甲賀三郎』トイフモノアリ  
右各種古浄瑠璃ハ此物語ニ本ツキテ作ラレタルモノト思  
ハル（再考却テ此物語ノ方ガ後ニ作ラレタルモノナラム）  
此物語ハ御伽草子ノ本地モノ、一種ナルヘク足利期末ノ  
作ナラン歟尚追考ヲ得ツ

所謂「諏訪の本地」は、兄のために地底にとじこめられた甲賀三郎の数奇な地底遍歴の物語で、生還した三郎が最後には諏訪の神と顕現する物語である。その伝本は三郎の名を兼家とするものと頼方とするものとの二系統があるが、本書は頼方系の伝本である。数多い伝本の中で本書に最も近いのが慶応義塾大学斯道文庫蔵の『諏訪草子』（写本一冊）である。慶大本は弘化四年（一八四一）に信州水内郡で写された本で、物語ゆかりの地での写本にふさわしく、終末近くに諏訪社の御柱祭や御射山祭の記事を有する点に特色がある。その記事は本書にもあり、信州在の飯島花月の所蔵であったことも勘案すると、本書も慶大本と相前後する時期に信州で写されたものと考えられる（書写

者の松井六右衛門は未詳)。記述は慶大本に比べやや簡略だが、慶大本のような誤脱は少なく、冒頭が「抑信濃国諏訪大明神の由来をくわしくたつぬるに」で始まっている点などは、慶大本より一段と信州という在地性を増幅させた伝本となっている。全体を五段に分っている点などは本書固有の形態で、『花月随筆』(昭和8)はこれを浄瑠璃で歌われた痕跡かとするが、その点は未勘。いずれにせよ、本書は慶大本とともに近世末期の信州における「諏訪の本地」の享受の様態を伝える伝本と言える。なお、先に掲出した本書の書きこみは『花月随筆』に収められた『諏訪大明神本地』研究のためのメモのようである。

翻刻はなるべく底本に忠実であることを原則としたが、句読点を付し、会話箇所をカッコで括り、適宜改行するなどして読みやすい形に改めた。底本にはほとんどの漢字に振り仮名があるが、煩を避けて特別な読みの場合以外は省略した。丁数はとくに記さず、異体字は「〆」(より)の外は通行の文字に改めたが、片仮名、清濁その他の表記は底本通りである。

最後に、本書の翻刻を許可された上田市立図書館に深甚の謝意を表するものである。

〔※本稿は昭和59年度の卒業研究をもとにしているが、解説は宮崎の調査に基づき天野文雄先生に執筆していただいた〕



『諏訪大明神本地』末尾(35丁ウラ・36丁オモテ)

〔翻 刻〕

諏訪大明神本地〔内題〕

へ抑、信濃国、諏訪大明神の由来を、くわしくたつぬるに、教  
照天皇の御代に、近江国甲賀郡かなかの子孫に、五代の孫、  
甲賀権頭と申人、御子三人持給ふ。ちやくし甲賀太郎頼平、次  
男頼忠、三男頼方、いづれも御門の御きしよくめてたく渡らせ  
給ひけり。

有歳の春の頃、権頭風の心地との給へて、今を限りと見へ給  
ふときニ、三人のきんたちをめされ、被仰出ける様ハ、「太郎  
ハ東のかたに屋形を立、東殿とよはるべし。次郎ハ西の方に屋  
かたを立、西殿とよはるべし。三郎は此家にて母に添へて念頃  
に孝し、中の殿と名乗べし。扱、三人の所願の事、太郎は下  
野・常陸・陸奥、三ヶ国を持べし。次郎ハ、飛驒・若狭・越前、  
三ヶ国を持へし。三郎は惣領として大殿なれハ、近江・美濃・  
尾張・三河・遠江・駿河・甲斐、七ヶ国を持べし」と、遺言堅  
ク被仰、むなしくならせ給ひけり。

かくて兄弟三人ハ、なけきてかいのあらされハ、野辺の送り  
を被成ツ、さま／＼御とむらひ被成けり。三十五日と申には、  
母上も御なけきの余りにや、俄に風の心地して、ついにむなし  
く成り給ふ。三人のきんたち母上によりか、り、なけき給ふ有  
様は、何にたとゑんかたもなし。扱、あるへきにあらされハ、

無常のけむりとなし給ふ。色／＼御とむらい被成けり。

扱、よく年の春の頃、三郎諏方ハ都へ上り、すぐに参内被成  
ツ、昼は終日夜もすがら、御とのひ被成ける。御門御かん限り  
なく、四年と申春の頃、御いとま給わりて、此ほとのうちせつ  
とて、山城守ニ被成、北陸道のちよくしを給り奉ル。此時の御  
門をハ孝元天皇と申奉ル。頼方かしこまつて御請を申、北陸道  
はしばらくおくなれハ、先大和国へ入、春日権頭屋形へいらせ  
給へけり。御門より追而、大和国けんひいしと云所を給わりけ  
る。頼方斜に悦ひ、春日の宮へ参りツ、七日の内御神樂をま  
いらせける。

扱又、ミとりの前と申ハ、権頭の姫なり。その名を春日姫と  
申て、御歳十七歳にならせ給ふ。かのひめをしやくに立せ、こ  
くしをもてなし給へけり。彼ひめ詩歌くわんけんにくらからず、  
御姿たくひなくわたらせ給ふ。頼方此由御覧して、「御身いか  
なる人」と、問給ふ。「権頭娘にて候」と、仰けり。ちよくし  
此由聞召、此姫を申請、北のかたになさはやと権頭に乞給ふ。  
権頭悦テ、やかて姫をつかハしける。ちよくしな、めにおほし  
めし、近江国へ歸りツ、かいろうとうけつ浅からず。

「かゝるめて度折なれや、いさや、まきかりして遊はん」と  
て、いふき山にて七日まきかり被成けり。北のかたも、山中に  
屋かたを立置まいらせ、御前へまきおろし見せ奉ル。太郎、次  
郎も同道ニて、都合その勢一千余騎、我おとらしとなりわひけ  
り。其時大キ成ル鹿、屋形の前へ来りけり。かゝる所へつち風

はつと吹来り、北の方の御座所へうつくしき草紙三冊吹入たり。則取りて御らんすれハ、ふしきや此草紙、三人のちことへんし、北のかたを引立て、辰巳のかたへうせにけり。兵共是をミテ、「これハいかに」と、肝をけし、君へ角と申けり。頼かたおとろきはせ帰り、屋かたのあたりにミ給へとも、更にひめハ見へさりけり。「今ハはや、命いきてもせんなし」と、歎き給ふも断りなり。「それがし、命限りはいづくまでも、たつぬべし」と、いぶき山より帰りツ、かすか権頭ふう婦に、此由かくと語り給へハ、兎角のへんしまさす、なミたにむせひ給へけり。や、あつて、頼方の給ふ様、「此うへハ、山々嶽々残りなく、日本はさて置ぬ、唐と天丘・かうらい・しんたんまでも、命限りにたつねへし」と、仰けれハ、権頭も頼母鋪たのもしくぞ思われける。

扱、其後に、頼方は精進けつさひして、春日の社へさんろう有。御神樂をまいらせ、「魔王に捕られし我か妻を、安穩に守らせ給へ」と、ふかくきせいをかけにけり。故二、大明神御納受ましゝて、「不食飽満とゆふ玉を、頼方ニとらせよ」と、御神託ましゝて、神は上らせ給へけり。頼方是を給わりて権頭に申されしハ、「命いきて帰りなは、姫をつれて帰りたると、思召候得」と、いとまこひして出給ふ。兄殿達へ申されしハ、「是迄の御出悦入テ候。これよりも御帰り候得」と、仰けれハ、「いつく迄も、もろともに、たつね廻り候事」と、同せい五百余騎にして、山々峰々嶽々をたつね給ふぞ断りなり。

二、先、山城の国には比叡の大嶽、紀伊国にハ大峰かつらき、吉野の奥伊賀の国には鈴鹿のミね、伊勢の国にハあわつかたけ、筑紫の国にハ彦根か嶽までたつぬれと、恋しき姫はなかりけり。是よりも板東にくたらんと、北陸道にさしか、り、多しせんハかいつかたけ、越中には立山、越中には妙光山、佐渡にハはく山、陸奥国にハだつこ川か岩屋、常陸国にはつく波山、下野にハ日光山、上野には赤木山・いかほがたけ、信濃国にハ浅間かたけ、甲斐国ニハ白根かたけ、さかみの国ニハ富士のたかねまで、たつねめくれと更ニなし。

今ハ力およハす、歎き給ふ所に、めのと宮内判官申けるハ、「まことやらん、信濃国立品のたけと申て醜鋪山おそろしき、かの山に大き成人穴有。是を御覧候得」と、申けれハ、頼かた悦び、立品のたけへといそぎける。

たけにもなれハ、かの穴を見給ふに、身のけもよたつ斗也。人間の通ふべきやう更になし。その時頼方、命を惜むニあらざれハ、皆ともニ申付、ふじをたちよせ、かこをくミ、七筋八筋に綱をつけ、此かこに頼かた入たまふ。三百余人の人々につなをとらせ、穴のそこへ入給ふ。その時おふせけるやうハ、「いづなりとも、此つなをうこかすときに引上へし」と、被仰。右の手ニハ、けんとう刀とゆふ釵かんざしを持、左の手ニハ、春日大明神より給わりし不食飽満の玉を持、穴のそこへ入給ふ。抑、此玉に、五ツのとく有。一には、ものをくわすとひたるくなし。二

二ハ、いしやうをきすとさむくなし。三ニは、火ニ入てもあつくなし。四にハ、水ニ入てもおほれす。五ニは、魔王におふても見付られす。此五ツの徳有玉を持せ給ふゆへにこそ、十方を自由自在に行給ふ。

扱、三十四、五丁斗入て見給へハ、大キ成置石有。そのうへゑ落つきたまひ、穴のそこハくらけれども、玉と釵の光にてそこ明らかにみへにけり。おくをさして入給ひハ、ほそき道にそ出にけり。五里程行て見給へハ、ゆふくたる橋有。そのはし過て見給ひハ、大キ成池有。大キ成御堂も有。三ちうの塔も有。竹の林のその中を、とをり過て見給へハ、八棟作りに結構し檜波普の家有。内へ入、縁へ上りてみたまひとも、人老人もなかりけり。頼方ふしきに思召、西の間のしやうしを明て見給へハ、女のこゑにて法花經の提婆品を読、また觀音經をもよみ給ふ。よくく是を聞給へハ、春日ひめのそのこゑなり。さてハあやしく思召、いそき入て見給へハ、姫君にておわします。頼方大キに悦ひ給ひ、「ふしきに是迄来りたり。はやく歸らせ給ひ」と有。ひめきミたもとにすかり付、「是はゆめかや、うつ、か」と、た、さめくとなき給ふ。

や、あつて、「此国をハいかなる国。扱あるしハ」と、問給へハ、「おん鬼国と申也。あるしハ折ふし、豊後の国のぐんしのひめ、美めよきかたと聞つるゆへ、とりて来り、ミつから合手にせんとて、とりに行せ給ふ也。いそきつれて歸らせ給へ」と、有けれハ、「扱ハ能折ふし也」と、姫君ヲ肩にかけ、本の

所へかへりツ、置石の上にて二人なからかごに入、やくそくの綱をうこかし給へハ、有しものとも心得て、えひこひ上けて引上ケたり。各く悦ひ給ひツ、穴のそなるふしきの事とも、様くかたり給ひける。良有て、ひめきミ仰ける様ハ、「余りにいそき候とて、歲月読奉るこんていの薬師經、扱大国にて持て遊ぶゆいせんとゆふ文書、ミつからかためミは第一のたから唐の鏡、又春日明神より給わりし、ありかけとゆふそうし、是らをわすれて候」と、仰けれハ、頼かた、「やすき事にて候。とりてまいらせ候はん」と、又本のかこに入、穴のそこへ下り給ふハ、運のつきとそ聞へけり。

去程に、次郎頼忠心中に思われけるハ、「弟の三郎に世をとられ、今に無念は晴やらす。三郎をうしなへて、世をとらはや」と思ひツ、太郎殿に対面し、此由角とかたりけれハ、頼平も無益とは思ひとも、「汝か、はからひ次第」と有り、甲賀の郡へ歸り給ふ。其時、次郎かこの綱を切て落し、三郎のめのと宮内判官か首を切、「残るものとも、いかに」と、あれハ、「兎も角も仰に随ひ奉らん」と、申けり。次郎悦ひ、それちも春日姫をつれ立、近江の国へそ歸りける。

扱其後に、ひめきミに仰けるハ、「今日よりも三郎か事思ひ切り、それかしになひき給ひ」と、仰ける。姫此由を聞召、「こは情なき仰かな。皆人は心はせのならひにて、打とくる人も有。御身様をハ情なき御かたところ申へし。みつからにおいてハ、ゆめくかのふへからす」と。あるひハ、「能経文書を読誦し、

詩歌に心寄せし事、是皆儀理と情慈悲との道。まことに古人の言葉にも『賢人二君につかへす。貞女両夫にまみへす』と、うけ給わり候也。ワリなき契りと云ながら、情の深き三郎殿をいつしかワすれ、御身に心寄せん事、思ひもよらぬ事ともなり。親兄弟の筋目をしらぬ大悪人。天命いかて遁るべし」と、つひになひき給わざり。次郎此由聞召、大きにいかつて、「其儀ならハ、いそき失ひ申べし」とて、「美の浦と云川はたにて、ころし申へし」と、云付て、切りての奉行に山田左近家利に申付、主君の仰不及せひに、ひめ君を引立て、川はたにこそ出にけり。姫めきミ仰ける様ハ、「とく／＼切せ給ふへし。さりながら、少のいとまたひ給へ」と、法華經の提は品たからかにあそはして、落るいをおしとめ、「それ法華經の功德は、一偈一句とうけたまはり、じゆじ、どくしゆは申におよハす、五ぢうてんゝずいきそくとく、と申伝へけれハ、ミつから釵にかゝる事、後生善所何疑あらんや」と、西にむかひ御手を合、「南無極樂世界、阿弥陀如来、願クハ、人穴におハします三郎殿と、一ツ蓮のうてなニすくひとらせ給へや」と、なミたを流しのたまひハ、その時太刀とり、目もくれ、心きゆれとも、御うしろへ立廻り、すてに御首切らんとす。しかれとも、ほけきやうのくとく、又八十羅せつ女三十番神の御たすけにや、吉田兵衛家長と申もの、兵共を余た引くし、一文字にはせ来り、「そのひめ君、切り申べからず」と、こひ／＼に呼わりける。太刀取、思ひよらざる事なれハ、ぬいたる太刀をひかへけり。角て、兵衛かものとも、

ひめきミを中にとりこめ、「此ひめころし申さん事、思ひもよらぬ事ともなり。はや／＼此かたへ渡すへし。さなくハ太刀と遁な」と、皆一同に申けり。そのとき左近申けるハ、「御道理也、断なり。我等も左様に思ひツ、御いたわしくは候得共、主命なれハ力なし。尤わたし申さん」と、ひめきミをわたしける。

扱、ひめ君の御供し、大和国へ上りツ、春日権頭殿へ渡し奉る。御悦ひハかきりなし。されハにや、此吉田の兵衛と申はひめきミ日頃めしつかわれし、御普代の侍也。三河国にて、此事を聞より、いそき上り、御命たすけ奉る事、ひとへに儀理忠孝のふかき事、申斗ハなかりけり。それよりも、山田左近せひなく屋形に立歸り、次郎殿ニ此由角と申ける。頼忠立腹し給ひとも、せんかたなくておわします。その後ひめ君ハ、春日大明神へ御参詣なされツ、七日こもらせ給ひツ、「乞願わくハ、今ひと度三郎殿ニめぐり合てたひ給へ」と、ふかくきせひを申されけり。まことに春日の御めくミにや、ひめきみの御命もなからへて、ついには、めぐり逢給ふかの姫君の心のうち、物うきとも、なか／＼申斗ハなかりけり。

去程に、頼かたハ、穴の底なる畳石まで御歸り御らんするに、綱を切つて落しけれハ、上ルへきやう更になし。「是ハいかなる事やらん」と、池のはたなる御堂に参り、御祈誓有て、心に思召さる、ハ、「あら口惜や。女に心ゆるすなとハ、今こそお

もひしられたり。いか様はハ、太郎殿か次郎殿に心をうつし、それかしを洗しつめけるよ」と、思召、むねたくひなかりけり。

扱、有へきにあらされハ、足にまかせて行程に、ひかしのかたへ行見れハ、夏のころかとおほしくて、田の草とりていたりけり。「此所ハ、いかなる国」と、問ひ給ひハ、「かうひん国」と、申しけり。それより東へ行まれハ、大き成穴ぞ有。それをく、り行見給へハ、秋のころかと、稲を茹てそいたりけり。「いかなる国」と、とひ給ひハ、「かうてう国」と、申しけり。それ北へ行見れハ、大き成穴ぞ有。是をく、りて見給ひハ、また田をうゆる国も有。人々此由みるよりも、「日本の人ならハ、さまをかへて来ルへきに、此人の有様只人にあらず」とて、とくく過シ給へけり。かくのことく、廿貳の穴をく、りゆき給へハ、大国にこそ出ニけり。秋のころかと覺しくて、木々の梢も紅葉して、鹿の声もかわり行有様、ワカ身のうへと思われて、心ほそさハ限りなし。世の有為無常をくわんしツ、漸々あゆませ行程に、大なるいほり有。八十余りの翁、鹿を追てそ出にけり。頼方を見るよりも、「いづくの人ぞ」と、申しけり。頼かた仰ける様ハ、「我ハ日本のもの」と、云。翁此よし聞よりも、「扱ハ左様にましますか。是方さきハ国もなし。此国ニとまりて、鹿狩して遊び給ひ」と、のたまへて、我宿にしやうしツ、能に持てなし奉る。

扱其後ニ、翁女房ニ追付て、「此人を能見るニ、神力ふかくましゝて、仁義をしりたる人なるへし。いさや我等か、むこ

にせん。女房由を聞よりも、「ワらわも、左様にそんするなり」と、それよりも、夫婦のもの三人持たるひめとをも、頼かたの前に出し、「いかにや頼方、此三人のひめの内、御身の氣に入候を妻と定、此国に御とまりまませよ」。扱、姉ひめハ八千歳の世をへたり。その次ハ、五千歳。その次ハ、二千歳。かやうに年ふれ候得共、三十斗とミへにけり。いつれも、色く様く装束をし給ひハ、世のつねの人に替りて、みめかたち美敷見へけれハ、何れをわけて撰ふへきにはあらねとも、妹君にちきりをこめ給ふ。二千歳とは申せとも、よの十七、八とそ見へにけり。頼方も三十三に成り給ふ。ひよくれんりの御契り、浅からすこそ聞へけり。

有時、姫君の給ふやう、「御身日本を出給へ、此国にいか程、とう留とや思すらん。はや、拾二年六月なり」と、御物かたり被成けり。いたわしや頼方は、有夜、古郷を夢に見て、なミたを流しおわします。北のかたハ見まいらせ、「いかなる事」と、問給ふ。頼方ハ聞召、「今は何をか包へし。今宵、古郷の春日姫を夢に見て候」と、仰けれハ、ひめきミハ聞召、「女の心ハ皆同。ミつからか、御身様の事思ふ様ニ、人もまた、さこそと思ひやられたり。今迄つ、ミ申たり。扱、此国をいかなる国と思すらん。ゆいまん国と申也。父の名はゆい萬長者。みつからハ、ゆい万姫と申也。父のはからひなき内ハ、千年万年送ルとも、日本へ帰り給ふ事、夢々以て有べからず。ミつからも、名残り惜くはおもひとも、御身古郷のひめミやを、乞給ふこそ断

なり。さのミハ、留メ申まし」と、かたり給へハ、頼方も、「やるかたもなき心かな。春日姫を思ひハ、ゆい万姫さるかたし」と、歎き給へハ、ゆいまん姫、「いつれ思ひハふかけれと、道理を思ひは痛わしや。さあらは、父に御いとまこひなし給へ」。頼方、悦ひ給ひツ、すてにその夜も明けれハ、頼かた長者の御前に出、申けるは、「是迄の御こん志を、忘れ申にあらねとも、古郷なつかしく候得は、御いとまたひ給へ」と、仰けれハ、翁由を聞召、「ひめか心をしらぬ也。姫にいとまこひ給へ」。頼方悦、姫君に角と云、ひめ君由をきこしめし、「名残りおしくハ候得共、御かへし申へし」と、頼方をつれ奉り、御前に出にけり。「甲賀殿、古郷恋鋪思召、帰り度と被仰る。御返しあれ」と、の給へハ、「兎も角ニも、わこせか、はからひ次第」と、云。其時、姫君仰けるハ、「御痛敷ハ思ひとも、御かへし申へし」。ち、は、此由聞召、「たかひに心をかんしツ、哀にこそハ思ハれける。さあらハ、ゆいまん国の奇特の所を、甲賀殿にミセ申さん。日本への御物語に被成よ」と、西の方、竹の林のその中へワけ入て、見給へハ、くろかねのついしニ、あかねの扉を立てたる所有。「爰を明よ」と、の給へハ、内より開き、「こなたへ」と申ける。内の軀を見給へハ、三十四五成ル女房達、拾四五人、糸をくりてそいたりける。それお過て見給へハ、あかねのついしに、白銀の戸ひらを立。「爰を明よ」と、の給へハ、内よりさつと開きけり。内へ入て見給へハ、二十五六の女房達、とのいと見へていたりけり。それを過て見給

へハ、銀のついしに、こかねの戸開を立にけり。「是を明よ」と、の給へハ、内よりさつと明にけり。内ニ入て見給へハ廿斗の女房達、とのいと見へて居たりけり。それを過て見給へハ、留りのついしに、やうらくの戸開有。又、八棟作り、檜わた普の御所有。それより四方を見渡せハ、松杉名木多ク有。南の方を見渡せハ、かいまんく／＼と極もなく、補陀落世界もかくやらん。それちも、ひかしのかたを見上れハ、山高ふして、麓ニは、いろ／＼の杜有。西をはるかに詠れハ、大キ成御堂有。三重の塔も有。まことにめてたき都也。御所へ入て見給へハ、赤地の錦を以て天井をはり、金の錦を以て柱を巻、紫縁りの畳を敷、頼方と姫君を此上に直し奉り、へいじ一具、蝶花形に包ませて、上郎達にもたせツ、数の肴を取そへ頼方す、め奉る。夜もすから、管弦こそは、被成ける。夜も明ぬれハ、翁の給へける様ハ、「扱、日本へ帰り給ふニ、余またの難所多かるへし」と、難所く／＼をかたり給へツ、其後に、鹿千頭と云餅を其数千百出しツ、頼方にまいらせける。「いかに頼方、此餅を一日に一ツツ、くらひ給へ。若二ツともくひ給わ、無覚束」と、のたまへけり。頼かた是を給わりて、屋形に帰らせ給へツ、旅の装束被成ける。

扱、姫君にの給ふやう、「此歳月の御情、かへす／＼も忘るまし」と、泪をうかべ申さる。ひめきミ泪を流しツ、古郷の事を思召、帰らせ給ふや情なし」と、たかひニ名残りを惜ミツ、暫く出もやらすして、袖をしほらせ給へける。扱、有へきにあらされハ、名残の袂振り捨て、泪と共に出二けり。ひ



め君泪のひまよりも、くとき事こそ哀也。「角有へきと知るな  
らは、何しに契り申へし。今の若れハ夢なれや。いもせの中の  
ちきりをハ、未来迄朽せし」と、互のいとまこひこハれ、「さ  
あらば、送り申さん」と、ゆい萬国を立出て、契り川と云河迄、  
送り越し申しツ、名残りの袂ふりすて、一首の歌をそ詠し  
ける。

此日頃馴し名残りのわすられで

さきたつものは泪なりけり

かやうに詠し給へけれハ、頼かた御返歌に、

二世迄と契りし事の忘れすは

尋ねてもこよ秋津島迄

たかひに名残りの歌をよみ、思ひの袖をふりすて、若れく  
ニ成給ふ。かの人々の御有様、申斗ハなかりけり。

四へ去程に、頼方ハ翁のおしへにしたかへて、なん所くを越給  
ふ。鹿千頭の餅、一日に一ツ宛くひ給へハ、信濃国浅間山の麓  
成ル、大沼の池へそ出させ給へける。それよりも、立品の嶺へ  
上り見給へハ、有し昔に替りけり。ゆい万国を立出て、千百日  
とは思ひとも、彼是合、三百余年と聞えけり。古の有し枯木ハ  
朽果て、名のミ斗そ残りけり。むかしの事を思い出し、我身の  
うへを、くわんするに、いと、思ひハ増りけり。

角て、旅の装束を、穴のはたに納置、「扱、春日姫ハ何とか  
なりておわすらん。若も此世にましまさは、今一度、めぐり合

てたひ給へ」と、日本のあらゆる神にきせいして、其後、古郷  
甲賀の郡へ行給ふ。古郷にも成りしかハ、有し昔に引かへて、  
草ぼうくとはへしけり。父の作りし御堂も、柱も朽も朽はて  
、金物斗そ残りけり、頼かた此よし見給へて、くとき給ふそ  
哀也。「角有へきと知ルならハ、何しに日本へ帰るへし。ゆい  
万国になからへて、兎にも角にもなるへきに」と、後悔すれと  
甲斐そなし。是ニ付ケても、「春日ひめ、何とかならせ給ふそ」  
と、猶も思ひハ増りけり。それよりも頼方は、御堂の内へ入給  
ふ。御経とくしゆ、おハします。かゝる所へ、おさなきもの共  
余た来り、三郎殿をみるも、「あら醜しや。爰に大キ成くち  
なわ有。逃ケよく」と、云程に、皆々おそれ逃けにけり。其  
時、頼かた思ふ様、「扱は、我姿へびに成りたるらん。浅まし  
や」と、仏壇の下へそ隠れ居ル。

かゝる所へいつくよりか、御僧余た御堂の内へ集りて、夜  
もすから、法花経をそ読給ふ。夜も明ケ、経も終りけれハ、上  
座の老僧被仰けるハ、「余りつれく成俣に、古きもの語成り  
共し給へ」と、有けれハ、中座の老そう仰けるハ、「むかし、  
此所の地頭おば、甲賀権頭と申せしか、子供三人持給ふ。兄を  
は甲賀太郎頼平、次男頼忠、三男頼かたとて、兄弟三人候得し  
が、父権頭所領を分けて死、兄の太郎、弟の次郎二家をゆづら  
して、三男三郎に惣領職をとらせけれハ、次郎頼忠、日比無念  
に思ひツ、折ふし、三郎殿北のかたを魔王ニとられ、日本山  
嶺尋給へと、その行かたハさらニなし。信濃国立品のたけ

に、大きな人穴有。此穴へかこに入さかりて、下界の地二入て、方々とたつねめぐり合、ミたひ所を見付ツ、、なんなく上らせ給へとも、ミたひ、とくしゆの法花経、唐のか、ミ、忘させ給ふ由をの給へハ、また取にゆかせ給ふ。其跡にて、次郎殿日頃の所存のおこしツ、、綱を切て落し給ふゆへ、上ルへきやうならすして、此下界の内をかなたこなたとく、りまハリ、此年月ハ、ゆい万国多渡らせ給ふと聞きつるか、昨日、此所へ来り給ふと申せしか、見へ給わぬハふしき成」と、語り給へハ、老僧仰ける様ハ、「きのふの昼の頃、大き成くちなわ、御堂の内へ来りけるハ、若是にてもや有やらん」と、の給へハ、又そばの老僧仰けるハ、「是は下界ハ、蛇道の住家なり。久く下界に住給ふ故、其姿にも成ぬへし。扱、それおハ何としてかわ、其しやうそくをハ、ぬき給ふへきや」と。上座の老僧仰けるハ、「石菖のおひたる池の水にひたり、朝日を拝ミ申せハ、そのしやうぞくハ、ぬけるなり」と、かたり給へハ、三郎殿、縁の下にて聞給へ大キに悦ひ、夜も明けられハ、大門へさかり見給へハ、案のことく、石菖のおひたる池水にひたりて、朝日を拝ミ給へけれハ、じや道の姿ハさつとぬけ、本の姿と成りにけり。

それより御堂へ参り給へハ、御僧達、「是こそ甲賀三郎殿よ」と、皆々悦ひ給へけり。其時、老僧、「是に小袖候」と、はなやかなるをまいらす。先の老僧、「是ニも候」とて、梶の葉の付たるひた、れをまいらす。右の老僧、「是ニも候」とて、弓と矢取扱まいらす。はや昼程にも成ければ、物語せし

老僧達、いつくともなくうせ給ふ。三人斗そ残りけり。

頼方涙をうかへ仰けるは、「只今迄、御座候御僧達ハ、唯人ならずと見申て候。誰人にて渡らせ給ひ候や」。老僧答て曰、「こともおろかや。まつ、上座の老僧は、伊勢太神宮是也。左座の壺番ハ、熊野権現也。二番ハ、加茂の大明神。扱又、右座の壺番ハ、梅田大明神。二番ハ、平野大明神。かく申それかしハ、近江国大原大明神也。されハ、水海は千年経てハくわはらと成ル。又千年へてハ、水海と成事を三度迄、見たる我也。御身佛神を深くいのり給ふ心さし、せめて成ルに依テ、神々ゆい万国迄付添て、しゆこせしめ給ふゆへ、穴のそこなる国々を、思ひの俣に見給ひて、ふた度日本へ帰りし事、唯神力のゆへそかし。ゆいまんこくにて、かうひんの翁となのりしハ、本地たいうそかいの大日也。いかにや頼かた、とくく春日の社へ参ルへし。春日姫は、命なからへ候」と、の給へて、かきけすやうに、うせ給ふ。

頼方、うれしさ限りなく、いそぎ春日へ参りけり。角とハしらて春日姫、泪と供に法華経を、どくしゆしてこそおわします。其時、頼かた、「唯今は迄参りたり」と、の給へハ、ひめ君此由御らんして、「是ハ、夢かやうつ、か」と、たかへにひしといたきつき、是ハくと斗也。扱、ひめきみの給様、「次郎殿ニにくまれて、美の尾の浦へ引出され、うしなわるへき所ニ、吉田兵衛にたすけられ、此社ニ参りツ、御身と別レ申せしより、今年三百余年也。其間の命をハ、春日大明神より、不老不

死の御薬あたへ給ふゆへにこそ、これまで命なからへて、二度めくりおふ事ハ、朽木に花のさくかとよ」。互ニうれしきさきりなし。扱其後二頼かた、あなの底なる有様、ゆい万国へ行し事、また、ゆい万国を日本へ帰りし時、千百日の道の物うさ、かたらハ、千代もよもつきし。又、日本へ出てそれよりも、立品の嶽へ上りミれハ、古しへの躰もかわり、いと、物うく思ふ事、また、古郷の蛇道にての有様、かゝる事もや有やらん。うれし泪ハ限りなし。頼方仰られけるハ、「かかる物うき国二住、またうらめしき事やあらん」。春日大明神よりも、神通を得たまへて、飛行の車を申請、二人ともにうち乗りて、東天丘へこひ給ふ。

扱其後に、伊勢太神宮より、神勅を請給へ、頼方ニハ、「日本へ帰りツ、いよく神の法をうけ、神力堅固の神とあらわれ、前生をしゆこし給へ」と、神通力を給われハ、頼かた御請を申ツ、飛行の車にうち乗りて、日本へとひ帰る。太神宮より神の法を給わりて、諏訪大明神と号しツ、信濃国岡屋の郷に宮柱を立、則名乗を頼方と申に依て、諏訪大明神と申なり。頼方とも、諏訪とも読ム。是よりも、岡屋の郷を諏訪の郡と申なり。扱又、父権頭殿ハ、近江国白髭の大明神と顕れ給ふ。母は、下野国日光権現と顕れ給ふそ、ありかたけれ。扱、甲賀太郎次郎も春日大明神より、神の位を請給ひ、太郎ハ、日向国大明神と申なり。次郎ハ、常陸国田中大明神と申也。いづれも神と顕れ、衆生さいと被成けり。扱また、上のミや下の宮と申ハ、頼方を

ハ上の宮と申て、本地普賢菩薩なり。下の宮ハ、春日姫なり。本地千手観音也。

扱、頼かたハ、久々下界に流ろうして、二親の弔ひ無沙汰ゆへ、不教のつミをくわんし給へて、「我社へ参るへきと思ふ輩は、おのれか親に孝すへし。親にかうくなるものハ、我前へ参らすとも、守るへき」との御誓願、「唯、親の菩提を念頃にとむらひ」との教へ也。扱又、ゆいまん国より、日本へ帰らせ給ふ其時に、産やより女老人立出テ、しとねをまいらせ、つかれをなをし奉るによつて、うふやハ少しも、いみ給わす。かの女のをんお、ほうせんための心なり。

扱、ゆいまん国のひめ君も、頼方ニ御名残り惜ミツ、あとをしとて、日本へ来り給へて、信濃国あさ間大明神と顕れ給へ、「一切衆生を守らん」との、ちかひなり。去程ニ、諏訪と浅間と程ちかく有けれハ、上のすわ、ねたみ給へ、「浅間のかたを、見るもいや」とて、うしろむき立給ふ。かの頼方の心の内、うれしきとも、中々申斗ハなかりけり。

扱是は扱置、爰に又、東天丘くるゑい国のかた原ニ、ちくる長者といふもの有。ひめ老人持けるが、美めかたちつくしく、東天丘にならひなし。名をハ、樂要姫と申なり。その国の大王を、そこわうと申けり。かのらく要ひめを聞給へ、「きさきニせん」と、乞給ふ。父の長者ハ聞召、「是より上の、しやから国の大王をむこにせん」と、思ひツ、御返事も申されず。御

使かさなれと、更にへんしもなかりけり。大王大キニいかりをなし、その勢一万余騎にして、長者か屋かたへ押寄せて、むたひに姫をとらんとす。ひめハ此よしミるよりも、重代の銚を持寄せるやつはら、おつちらし、がうか河の水上に銚さかさまに押立て、其上にすミ給ふ。そこわう此由聞召、「其所も我等か知行所なり。しからは我にしたかへ」と、の給へハ、ひめ此由を聞召、「さあらハ爰をも立たん」とて、銚ぬき脇にさしはさミ、天の車に打乗りて、りうさそうれいと云河をとひこへて、はくさ国へ行給へ、それより車をさし置て、早船に打乗り、日本さしていそかせ給へハ、程もなく筑紫の今津に付給ふ。「仏法は、どうぜん」と、聞召、それより、信濃と上野の境なる荒船山に水をたへ、天の早ふねをうつふせて水にうかへ、「此世界に火の雨ふらハ、此水にてけすへし」と、ふせ給へて、船の上に社を立、住給ふ。故ニ、新船大明神と申なり。されハ又、かうか河より、銚を拔持給ふ故、はづむ大明神とも申なり。されハ、銚拔神と書て、はづむ大明神と読となり。上野国小幡一ノ宮是也。頼方ハ、日光山の社に、母の御座故、常に通ひ給ふ道成に依テ、新船大明神へ立寄せ、たひく宿を借り給ひ、後には、夫婦と契りをなし給ふ。

かくのことくいづれも神と顕ハレ、一切衆生を、しゆこせしめ給ふ所に、「ことに頼方大明神ハ、菩薩にてましますか、山野の獸を殺シ、御前に掛らるハ」と、不審有けれハ、大明神、社檀の戸ひら押開、梶の葉のひたれめし、御手には、けんさ

しと云釵を持給へ、御神詫にいわく、「我むかし、ゆい万国ニて、鹿狩して遊びし事、皆慈悲の殺生也。故ニ、神と顕レ、其語ニ曰、

業盡有情雖放不世

故食人身同証佛果

文の心は、そうしてせつしやうおのミ、生るを殺したらん輩ハ、此文をとなへべし。是を頼方の四句の文とゆふ也。かうのつきたるうせうハ、はなつといへとも不生、故に人身に食して同くハ、仏果に生せよ」と、御神詫ましめて、神ハ上らせ給へけり。故ニ、七月廿七日みさ山祭とて、御狩有り。毎年其日に、鹿二ツ宛出て殺さる也。殺生をするに、三ツの心有。鳥類畜類によらず、矢にあたらずして遁る、事もあり。是を業の来らずして、めてたきものと思ふへし。又、矢に中りて手負て行も有。是は、つミ有ル畜生、因果の報ひ有やらんと、ふ便なりとくわんすへし。又、たちまち死したるハ、いそき此四句の文をとなへし。是を三神仏性とゆふなり。又、七年二一度ツ、御柱とて大祭り有。是へ参る輩ハ、現世安穩、子孫繁昌、後生善所と、何疑のあらんや。然は、此書を一日二一度宛よめハ、すわへ日参の心なり。かならず、うたかふ事なかれ。

諏訪大明神本地 終

松井 六右衛門〔印〕